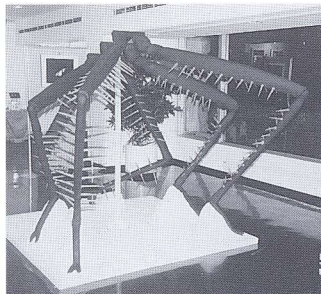


橿原市昆虫館だより

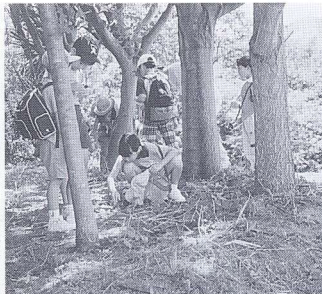
G O N T A

(通巻37号)

Vol.10 No.1



8月 特別展「虫のあし」



7月 夏の虫観察会



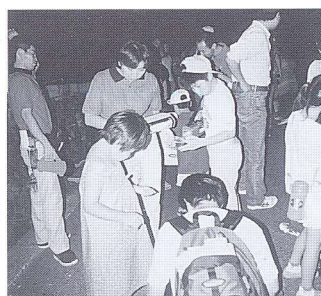
6月 ホタル観察会



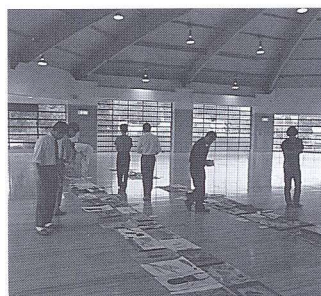
4月 春の虫観察会



8月「むしむし実験室」



9月「秋の虫観察会」



11月「むし大好きコンテスト」
審査会



11月「むし大好きコンテスト」
表彰式



10月「昆虫館の秋祭り」



11月「むし大好きコンテスト」展



11月 むしむしゼミナール
「むし大好き大集合！」

西暦2,000年の新春を迎えて

明けまして おめでとう ごさいます

今年は20世紀を締めくくる画期的な年。総てのことに心新たにに取り組む一年となるでしょう。来る21世紀は地方自治の時代と言われており、一人一人が義務と責任を果たしていかなければならないと思います。このような時代を目前に控え、私共昆虫館の果たす役割は重大であり、今年は新しい一歩を踏みだしたいものです。そのためにも、職員は英知を絞って企画立案していかなければなりません。関係各位のお力添えも併せてお願い申し上げます。

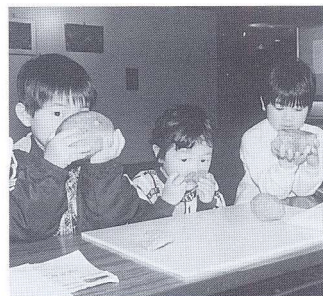
さて、橿原市昆虫館は、昨年10月10日で開館10周年を迎え、記念行事として、10月24日に「昆虫館の秋祭り」を実施。クイズラリーやクラフト等を一日楽しんでいただきました。さらに、11月2日から第2回作品コンクール展「むし大好きコンテスト」を開催。芸術・研究部門共に、市民はもとより県内外からの出品があり、4歳から70歳の方まで総点数は830点、いずれも力作揃いでした。優秀作品には表彰状と記念品をお贈りいたしました。展示中、数多くの来館者があり、なかなか好評でした。そして、これらの行事を「橿原市昆虫館友の会」と共催で実施したことは、私共にとって大きな前進となりました。

今年は、新時代に遅れをとらないよう、職員は一丸となって新しいことに挑戦し、より一層楽しんでいただける昆虫館にしたいと考えております。皆様方のご来館を職員一同、心よりお待ちしております。

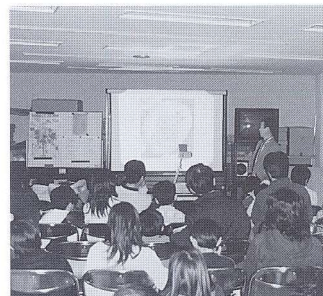
平成12年(西暦2000年)1月

橿原市昆虫館

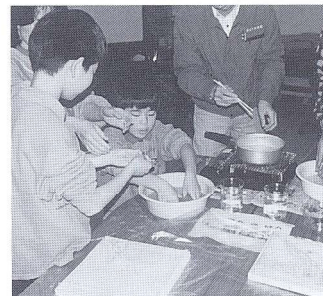
館長 坂本 善重郎



4月 企画展「昆虫化石」



3月 むしむしゼミナール
「化石を調べよう」

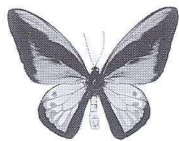


2月 観察教室
「カイコからの贈りもの」

だいたい だいたい むし大好き大集合! Q&A

Q 世界で一番大きなチョウは、なあ～に？

A 翅(はね)を広げた大きさで一番大きなチョウは、アレキサンドラトリバネアゲハのメ。ゴライアストリバネアゲハスだろうと思います。広げると20cm以上もあります。



翅の面積が大きいのは、セラム島のゴライアストリバネアゲハのメスです。片方の前翅(まえばね)の長さが、オスで11cm、メスで13cm位あります。まるでグローブですね。 Y

Q チョウは、何種類いますか？

A 世界中には、約1万9000種のチョウがいます。

日本には、約230種類のチョウが暮らしており、ときおり風に運ばれてやってくるチョウ(迷蝶)も含めると250種類ほどでしょう。 Y



展示温室のナガサキアゲハ(白化型)

Q 翅を開いたら、フクロウや怪物の絵のようなチョウはいますか？

A 翅(はね)を開いて上下をひっくりかえし裏側の模様を見ると、フクロウを正面からみたように見える、フクロウチョウというチョウがいます。これは鳥をおどかすのに役立つと考えられています。

怪物みたいな？

ひょっとしたら、鳥が驚く“怪物”模様のチョウも見つかるかもしれませんね。 Y

Q 長生きする昆虫は、なあ～に？

A アメリカにジュウシチネンゼミというセミがいます。幼虫が土の中で17年間もくらしています。でも、親(成虫)になると、交尾して卵を産んですぐに死んでしまいます。

アリやシロアリの女王は、土の中で長く生き続けます。シロアリの女王は、日本では10年くらい卵を産み続けると言われていますが、アメリカのものは20年以上も卵を産み続けたという記録があります。 Y

Q 今まで食べた中で、一番おいしかった昆虫は何で、どのようにして食べたのですか？

A イナゴです。

イナゴを取ってきて、糸に通してしばらく置くと腸の中のものが排出されます。元気がなくなったものを細い竹串にさして火で焙って、醤油をかけて食べました。残酷であり子供には言えませんね。 Y



イナゴの佃煮

Q ガムシはどうやって冬越しするのですか？

A 池など、ガムシが生活している水中で越冬(えっとう)すると考えられています。

動かなければ呼吸(こきゅう)に必要な空気はごく僅かなので、水中でじっとしていられるのです。

しかし、冬場でも身体を動かせる水温になれば、翅(はね)の隙間(すきま)や腹部(ふくぶ)に貯めている空気の交換に、水面まで泳ぐ姿を見かけることがあります。 I

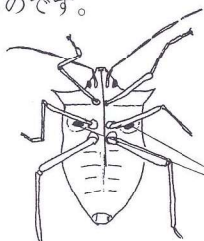
Q 日本で一番昆虫の種類が多い県はどこですか？どれ位いますか？

A 今までに発表された昆虫の種類数が5,000種を越えているのは、愛知県(1991)が6,057種、広島県(1997)が7,039種、石川県(1998)が7,912種、埼玉県(1998)が9,180種で、現在、埼玉県がトップです。しかし、まだ解らない所が多く、各地で研究者が調べているのが現状です。昆虫館のある奈良県も、昆虫を完全に調べ上げればトップになるかもしれません。そのためには、昆虫を研究する人が一人でも増えなくては!! M

Q カメムシは、なぜクサイの？

A 天敵(てんてき)から身を守るために、くさい匂いを出しているのでしょう。

でも、仲間どうしでは、その匂いが敵の来たことを知らせたり、群れを作ったりするサインにもなっているのです。 M



カメムシの臭腺(ツノアオカメムシ)左右に臭いの出る穴がある

Q セグロアシナガバチの研究のしかたを教えてください。

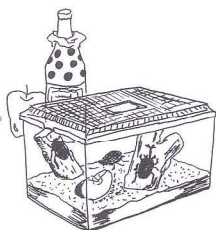
A 日本にいるアシナガバチの中で最も大きな種類で、町中にもおり、家の軒下等に巣を作るので、観察しやすいでしょう。4月中頃より冬越しから目覚めたメスバチが、1匹で巣を作り始めます。段々ハチが増え、巣が大きくなる様子を、双眼鏡等で毎日観察すると良いでしょう。しかし、巣に近づき過ぎたり、巣に触ると刺されますので気をつけてください。エサを取ってくる様子等、いろいろ観察してみましょう。 M

昨年11月14日に開催した「むしむしゼミナール～むし大好き大集合！」の際に寄せられた質問について、講師の先生方に答えていただきました。その中から18題をご紹介します。答えて下さったのは、保田淑郎先生(Y)、宮武頼夫先生(M)、伊藤ふくお先生(I)です。

Q カブトムシ(成虫)のメスがまだ生きています。冬越しさせたいのですが、どうしたらいいのでしょうか？

A 温度変化が少なく、太陽の当たらない場所に飼育容器を置き、適度に湿らせた腐葉土をたくさん入れます。活動する

ようなら市販のカブトムシのエサ等を与えます。リンゴを与えて長生きさせた方もいます。 I



Q カブトムシとクワガタムシを長生きさせる方法を教えてください。

A やたらと飼育容器から出して遊ばないことが大事です。

また、カブトムシもクワガタムシも、交尾をすると寿命が短くなるようです。オスとメスを分けて飼育したり、大きめの容器で少数に分けて飼育するようにしましょう。それらのことを守れば長生きします。

もちろん、エサの世話や、マット(腐葉土や土)にカビが生えないようにする等は飼育の基本です。 I

Q なぜ、カブトムシにはツノがあるの？

A 動物は、自分が生きていくために、いろいろな工夫をしています。強くないと自分の子孫を残す(よい相手を見つけて子供をつくっていく)ことができません。

特に、カブトムシのオスはメスをめぐってケンカをします。立派なツノはケンカに役立つのです。 Y

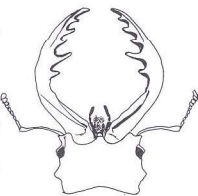


Y コーカサスオオカブト

Q ミヤマクワガタが蜜を食べるとき、口からお皿みたいなものを出していますが、あれは一体何ですか？

A 昆虫の口は、上の方から「上唇(うわくちびる)」・「大腮(おおあご)」・「小腮(こあご)」・「下唇(したくちびる)」の順に並んでできています。クワガタムシの口

の「小腮」は、毛がたくさん生えていて、樹液をすくってなめるようにできているのです。 Y



ノコギリクワガタの顔

Q クワガタムシのエサは、何をあげればよいですか？

A 自然界ではクスギ等の樹液をなめて生きています。ペットショップでは、カブトムシ・クワガタムシのエサとして、樹液に似せたゼリーを売っています。これが一番手軽に調達できるエサです。また、リンゴ等の果物もよく食べます。

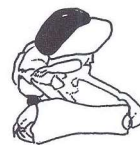
それ以外には、焼酎に黒砂糖を加えて少し煮て、室温程度に冷ました液体をスポンジ等に浸してあたえてもよいでしょう。 I

Q ヤゴの下あごの長さは、どのくらいありますか？

A ヤゴが獲物を捕らえる口の下部分は、下唇(かしん)と呼ばれています。ふつうは折り畳まれているのですが、延ばすと頭(顔)の長さの3～4倍にもなります。

下唇(あご)の長さは、トンボの種類によって違います。今年ヤゴをつかまえたなら、

ぜひ実際に測ってみましょう。 M



ヤゴの顔

Q カマキリの一齢幼虫から成虫までの上手な飼い方を教えてください。

A 一齢幼虫から成虫まで、昆虫等の生き餌を食べますので、その時の体の大きさに合ったエサを与えます。一齢幼虫の時は、アブラムシ(アリマキ)や、ショウジョウバエ(バナナ等果物を少し腐らせて放っておくと飛んできて増える)等がよいでしょう。幼虫をまとめて飼うと共食いしますので、一匹ずつ分けて飼いましょう。エサやりが大変ですので、成虫まで飼おうと思ったら、あまりたくさん飼わない方がいいと思います。 M

Q この間、カマキリが卵を産むのを見ました。いつ頃かえりますか？

A カマキリは卵で冬を越し、春に幼虫がかえります。4月中旬から5月にかけてかえるでしょう。

しかし、卵を暖かい室内に置いておくと、冬の間でも幼虫がかえってしまい、エサに困ることになるので、暖かい室内に置いてはいけません。屋外の寒い所に置いておきましょう。 M



M

オオカマキリの卵のう

Q タマムシのえさは、なあ～に？

A 成虫は、エノキ(ゴマダラチョウやオオムラサキの幼虫の食樹)の新葉を食べます。

7～8月頃、山の中でエノキのこずえを見上げると、たくさんのタマムシが新葉に集まって飛び交っている光景を見ることがあります。

また、幼虫はいろいろな木の朽ち木を食べます。 M

(P 2-3 は日比が担当しました)

にほんのファールと呼ばれた人

いわ たく に お
岩 田 久 二 雄
(1906~1994)

岩田久二雄は、1906年（明治39年）大阪船場の商家に生まれる。父親は輸入問屋『高麗屋』を営み、5人姉妹の中の唯一の一人息子であり、それは唯一の跡取りを意味していた。最初の記憶に1909年の大阪の大火や1910年のハレー彗星を挙げているが、それとともに家の周囲の草むらにいるショウリョウバッタやヤンマを印象として残している。1910年に一家は北摂（大阪府の北西部）池田に移る。猪名川が平野部に流れ込む自然環境豊かな田舎町で少年時代を過ごす。1913年、師範学校附属小学校に入学。学校周辺の自然で遊び、クワガタムシ・カミキリムシ等を捕えては、飼育したり、小川で貝や小魚を捕えたり、生物たちが遊び相手だった。当時の附属小学校は、種々雑多な家庭の子息を教育する実験校で、友人の中でも特に農事試験場の子、植木屋の子と仲良くなり、彼らから、野山の昆虫をはじめ動植物の知識を得、有毒な生物、ムカデ、ハチ、ヘビなどに対する扱い方を身につけた。この少年時代の原体験が、生き物好きな少年の進路を決定づける一因となったのは確かだ。

1919年、府立北野中学（現在の北野高校）に入学。都会の真ん中にあり自然からは疎遠な環境であったが、ある老博物学者と実話を教える僧侶に影響をうける。一般向けの昆虫関係の書物といってもほとんどなく、中学の博物学の教科書も高等生物から下等生物へと羅列的に並べて説明しているだけで、昆虫は数種しか記述がなく、それらはすでに馴じみの昆虫たちばかりであった。

当時の教育状況に触れ、現在のように生物学の道でも、遺伝学、生理学、生化学の最新の知識をあたかも解明されたかのようにつめ込まさせられたら、生物に対する興味もしぼんでしまったかも知れない。教育には未知の領域だらけだというある種の素朴さも必要であり、粗食ほどよいのではないかと回想している。

受験の難関は、中学から高校への入学試験であった。高校に入学すれば、特定の学部、学科を除いてほぼ無試験で入学出来た。入学試験では、その年度の選択科目が博物学になり、大阪高校（現在の大阪大学）理科2類（独語クラスで主として生物系コース）に入学。幼少時代を過ごした土地に高校がある

のを喜んだのもつかの間、当時の自然豊かな光景はなく、授業をさぼって、北摂の自然へと没入していく。高校は通常3年制であるが、ハチの野外観察に熱中しすぎて、2年落第している。動物学教室の森田淳一教授の影響を受け、池や川の下等動物に興味をもったが、これまでの昆虫好きの体験と、ある著書との出会いによって、昆虫学を研究しようと決意するに至る。それはファール著『昆虫記』の翻訳書を読んだからであった。この決意が、並大抵のものでないことは、彼の次の言葉からうかがえる。「ワシは乞食をしても好きな研究をする」と父亡き後の家業と遺産相続を放棄したのであった。

『『昆虫記』の翻訳書は、私にとっても全く干天の慈雨であった。』と述べている。この『昆虫記』の翻訳は1923年に叢文閣から出版され、第1巻は大杉栄が翻訳している。後年、ハナバチ研究の第一人者の坂上昭一氏との対談でも、その名訳ぶりを賛め称えていた。昆虫記は全部で10巻ある大冊であるが、中でも出色なのはハチについての行動観察であり、第1巻～第4巻までのほとんどを占めている。彼はこのファールの見た、ハチたちの行動のおもしろさ、多様さ、本能行動の不思議さに打ちのめされてしまったと言ってよいだろう。その後、北摂のフィールドを中心に記録したハチたちの貴重な記録の代償が2年間の落第であった。猪名川の川原にはいつくばって、ヤマトハキリバチの集団営巣の克明な観察記録から始まり、トックリバチ等、20種以上ものハチの習性観察を行っている。

後にふり返って、若い時の冗長すぎると思える記録文は、克明であればあるほど後から見直す価値がある。反対に整理され要約されてしまったものから、見直す価値がないものが多い。観察に馴れてくると、わかったと思い込んでしまうと、要領良く省略してしまう。克明さと正直なことは若い時代の特徴である。

「ハチの行動の何がそんなに面白いのだろうか。二年間も留年するほど面白いものなのだろうか。」『昆虫記』を全く読んでいなくても、ハチの行動は熱中するほど面白いのである。知能によらず、微に入り細に入り目的にかなった本能に導かれる行動が、それぞれの種の子孫を残すためである点に驚かされ

るのである。実は学問、研究というのは本来面白いもので、強制されたりしてするものではない。

1928年、昆虫研究者を志し、京都大学農学部農林生物学科に入学。昆虫学教室はアメリカ帰りの湯浅一郎教授がうけもち、彼にとっては最適な選択であった。大学で一番期待していたのは、昆虫に関する文献であった。当時のこと、便利なコピーなど無い時代、文献は全て原文を筆写、挿図までを描写したという。日本では、1920年に昆虫学会が設立されたばかりで、文献といっても外国の文献を集めねばならず、交換して入手するためにも自前の論文を書く必要に迫られた。卒業論文は高校時代に観察した「日本産トクリバチ5種の比較習性」であった。

習性を記録したハチについては、その種名を同定しなければならない。昆虫学者なら虫の名前なら何でもわかるとは限らない。報告するハチは、九州大学の安松京三さんに送ってすべて同定してもらっていた。安松さんは、九州帝国大学を卒業後、その助手として残り、膜翅目（ハチ目）の分類学を専攻していた。

岩田は卒業後、大学に無給助手として残り、手もとにある記録を整理して次々と論文を発表した。研究生活も軌道に乗りかけた1934年4月、昆虫学教室の先輩のすすめで、福井県の武生高等女学校に教諭として赴任、初めての俸給生活であった。3年間、女学生と学園生活を楽しみ、友人の英語教師と日本酒を飲むようになった。逆に自然観察には恵まれず、いよいよ南方への思いが高じて、1937年、台湾で昆虫研究を続ける。この台湾での研究生活は金銭的には全く余裕がなかったがハチ類の観察には大いに満足し、このまま台湾で骨を埋める気持ちかわく。当時、台湾で行方不明になった鹿野忠夫という博物学者の例もあり、京都在住の今西錦司を中心とした生態学グループの心配から台湾から強制送還される。

帰国後は、自分の自由時間確保を第一に府立高津高校教諭となり、数ヶ月間滞在した台湾のデータをまとめ次々に報告する。1941年太平洋戦争勃発。戦局の悪化とともに、あるいは遺書を意図して、『蜂の生活』、『自然観察者の手記』を著す。その後、海南島にある木原生物学研究所に綿花の害虫調査研究のために赴任する。1942～1946年の間滞在した。この島では、オオコオロギを狩るシャムアナバチ（体長約3cm）の習性観察を行っている。

1946年、無事帰国したが海南島での貴重なデータ

は中国当局の没収を心配して友人に託すが、その後音信不通となる。北野中学教諭を経て、1948年香川県立農業専門学校（現香川大学農学部）に赴任。戦後の食糧難のため生活は苦しく、当初は家庭教師もしてしのいでいた。温暖な平野部で水田地帯が広がり、昆虫研究にとっては余り興味の持てる自然ではなかったが、それでも、水田内の昆虫や生物間の相互関係の重要性やそのための害虫だけでなく天敵をも含む個々の昆虫の生態調査の必要性を問いたり、天敵・害虫とも無差別に誘殺してしまう誘蛾燈の短所についても鋭い指摘をしている。

1950年、旧台北帝大のスタッフを中心として兵庫県に農科大学が設立され、昆虫学の教授として迎えらる。その後、農科大学が神戸大学農学部になり定年を終えるが、その後女子短大で教べんをとりながら昆虫の習性観察を続けた。

1971年にはハチ類研究のバイブルともいえる『本能の進化』を出版。また一般向けには、『自然観察者の手記』、『昆虫を見つめて五十年』を著し、自然観察の的確さと文章の格調高さから、『日本のファールブル』とたたえられた。1994年88才で生涯を終えた。晩年は病床にあってもハチの観察を続け、全国の若者や、恵まれない境遇にいて研究を志す人たちにはげましや助言の手紙を送り続けたという。

(敬称略)

◎引用・参考文献

「ハチの生活」岩田久二雄著 1974年 岩波書店
(小学校高学年から十分読めます)

「ドロバチのアオムシ狩り」岩田久二雄著
1973年 文研出版(小学校低学年から、科学絵本)
「昆虫学五十年あるナチュラリストの回想」
岩田久二雄著 1976年 中公新書

「本能の進化」岩田久二雄著 1971年 サイエンス社

「なべぶたむしー神戸大学農学部昆虫科研究室50周年記念」

神戸大学農学部昆虫科学研究室・同窓会 1999年
「自然観察者の手記ー昆虫とともに五十年」
岩田久二雄著 1975年 朝日新聞社

(中谷)

カラスノエンドウに集う虫たち

その2

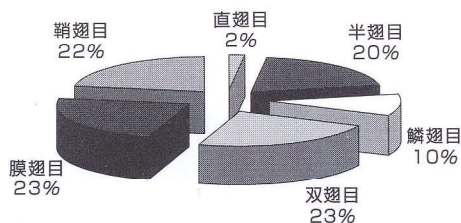
GONTA34号でも紹介しましたが、春に花を咲かせるカラスノエンドウには様々な昆虫が集まります。どこでも見られる、この雑草の面白いところは、花以外に、基本的に花と同数の、多くの蜜を出す蜜腺を持つことです。



そこで、昨年3月中旬から5月中旬にかけて（昆虫館の周辺では、カラスノエンドウの開花期は3月中旬から5月中旬）昆虫館の脇の3ヶ所で、延べ30回ほどカラスノエンドウにいる昆虫を調べました。その結果、6つのグループ（目）にわたる51種類もの昆虫が訪れたことが確認できました。尚、この種数はカラスノエンドウ上で何らかの摂食もしくは産卵行動が確認されたものだけで、例えば、シロホシテントウの様に、たまたま一時的に休止していたと思われるような種類は除いてあります。

さて、これらの虫をグループ（目）ごとにみると、最も種類数の多かったのが、アブやハエの仲間（双翅目）とアリ・ハチの仲間（膜翅目）で、それぞれ12種類。次いで、テントウムシ・ハムシ等の仲間（鞘翅目）、アブラムシ・カメムシの仲間（半翅目）となり、この4つのグループで全体の9割近くの種を占めました。

種数割合

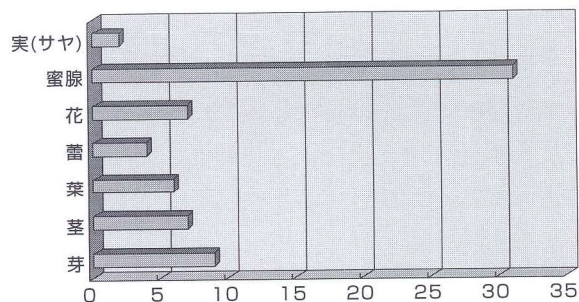


次に芽の部分、葉の部分、茎の部分…といったように、カラスノエンドウの各部位ごとに摂食している昆虫の種類を調べました。

ただし、これらの昆虫の中には、テントウムシやヒラタアブの仲間の幼虫のようにアブラムシを食べる捕食性の種も含まれますが、これらは当然アブラムシが多くいる芽や茎の部分で多くみられることになります。

その結果、最も多くの種類の昆虫が見られたのはどこだと思いますか？ 実は、花でも芽でもなくて、最も多くの種類が見られたのは、「蜜腺」だったのです。

部位別訪虫種数



蜜腺の蜜をなめていた昆虫は実に31種。これは、全体の6割強にもなり、次いで種類の多かった芽の部分で見られた昆虫が、捕食性の種も含めてもたった9種だったことから、いかに多くの種類が、蜜腺を利用していただかわかるでしょう。

また、この蜜腺に対して、赤紫色のきれいな目立つ花では、花卉を食べていた2種類のハムシを含めても8種の昆虫しか確認できませんでした。

多くの植物は、昆虫を誘い花粉を運んでもらうために、蜜を分泌し、美しく目立つ花卉を付け、よい匂いを漂わすように進化してきたと考えられていますが、花以外に、多くの昆虫を集める蜜腺を持つカラスノエンドウの場合はどう考えればよいのでしょうか。



次の機会に、カラスノエンドウに集まる昆虫の具体的な種について紹介し、もう少し深く検証してみたいと思います。

(木村)

こんちゅうたんけん き
昆虫探検記(1)

さが 探してみよう! 小さないのち

「みなさん、これから昆虫採集に出かけてみませんか?」と突然、この寒い時期に言ったら、笑われそうですが、昆虫採集は温かい時期だけに行うものではありません。さて、虫たちはどこにいますでしょうか?

この木枯らしの吹く季節、虫たちはそれぞれの方法で温かい春の訪れを待ちわびています。また、私たちの身近でも、ふとしたところに隠れているかも知れません。

そこで今回は毎年、年末に行っているアサギマダラの採集にみなさんをご案内します。

アサギマダラについて、これまでのGONTAで何回か紹介してきましたが、当館では主に秋から春までに見られる季節限定の蝶です。

しかし、採集と言っても今の季節、成虫が飛んでいるはずがありません。そこで冬でも枯れず、アサギマダラの幼虫が食べるキジョランが群生している奈良県東部の山間部で越冬中の幼虫を採集します。また、キジョランの生育状況や周辺の環境なども一緒に調査します。



▲キジョランの群生とアサギマダラの若令幼虫(円内)

採集の用具は夏だと捕虫網と虫かご、服装はシャツなどの身軽な格好で出かけますが、今回の採集は少しちがいます。まず防寒具で寒さ対策をします。そして、急な傾斜でガレキなど不安定なため、安全靴を履き足場をかためます。見つけた幼虫を入れるための飼育ケースを数個持ち、さあ出発です。

意気揚々と出ましたが、キジョランが群生している場所にたどり着くまで、全く山道がなく、所々木が倒れている急な斜面を登って行きます。少しでも足を踏み外すと下へ滑り落ちそうな場所で、慎重に足元を確かめながら登ります。また、群生している場所はわかりにくく、大木やガケなどを目

印にしながら探します。少しでも目印を間違えるとキジョランに行きつかない場合もあります。

そして、最初の群生している場所に着くと、キジョランの葉はみずみずしく生育していました。早速、幼虫がいるか葉の裏を1枚1枚丁寧に探し、幼虫がいると採集します。ここで、みなさんに葉裏のアサギマダラの幼虫を簡単にみつけるコツを伝授しましょう。

まず、キジョランの葉に約10mmほどの小さな丸い穴が空いているか見ましょう。もし穴が空いていれば、その葉や近くの葉をめくって見ましょう。すると食痕の新しい葉には、よく若令幼虫が糸の座に止まっているのがみつけれられます。簡単でしょう。

丸い穴は、若令幼虫が葉に丸く傷をつけたのち、その内側の葉を食べていき、その食べ跡が小さな穴として残ったものです。越冬幼虫はあまり移動しないため、みつける時の目印になります。

初めて幼虫を見つけた時は、宝石を見つけた感じで寒さも吹っ飛びます。

キジョランの群生している場所は4~5か所あり、約2時間ほどですべてまわることができます。昆虫館に持ち帰った幼虫は飼育ケースに4~5頭ずつ分け、温かい飼育室(約23℃)で飼育を行います。成虫になったアサギマダラは、放蝶温室に放蝶し、累代飼育を続けていくのです。

しかし、持ち帰った幼虫すべてが成虫まで成長するわけではありません。なぜなら、終令幼虫や蛹を採集すると、時折、寄生バエに寄生されていることがあるからです。寄生バエはアサギマダラの幼虫の体内で栄養を取りながら育ち、蛹になったアサギマダラに穴を空けて出てきて、蛹になります。そして、数日後にはハエが羽化します。そのため、あまり終令幼虫や蛹を持ち帰らない方が良いと思います。また、アゲハチョウの幼虫などでも寄生バチなどに寄生されていることが多いです。

今回は、アサギマダラの採集について紹介しましたが、その他にも昆虫によって、それぞれの採集方法があり、季節によってもちがいます。

みなさんもよろしければ寒さに負けず、1時間でも良いですから、まずは近くの公園や街路樹などを調べてみてはいかがでしょうか。小さな生命が見られるかも知れません。

(久米)

ざつきちょう
雑記帳こんちゅうかんたいじけん
昆虫館大事件

ここで、奈良県橿原市南山町624番地 橿原市昆虫館で起きた大事件についてみなさんに報告します。

「昨年9月中旬のとある昼下がり、昆虫館の展示温室に暮らすたくさんのチョウが、何者かによってバラバラ死体にされるというショッキングな事件が起きました。

被害届によりますと、コノハチョウ、カバタテハ、ツマベニチョウ、マダラチョウなどの死体が多数発見されたとのこと。第一発見者の昆虫館スタッフの話では、温室の園路に点々とチョウの翅が散乱し、最初はカマキリの仕業だと思ったそうです。しかし、周囲にカマキリのいる様子もなく、園路のど真ん中に死体があるのは、カマキリの仕業にしてはおかしいということになりました。では、一体だれがこんなことを!?

数日後の朝、スタッフが植物に水やりをしていると、ハチドリの鳴き声に交じり、温室では聞きなれない声が聞こえたそうです。鳴き声の方を見ると、そこにはなんとスズメが…。スタッフは犯人をスズメと断定し、なんとかスズメを捕獲しなければと

思ったそうですが、名案も浮かばずに日数が経ち、温室内のタテハチョウとシロチョウの被害頭数は、100頭以上におよびました。背に腹は変えられないとスズメ捕獲大作戦が決行されたのです。

捕獲の方法は、チョウの死体を置き、その上にカゴを棒で支えて釣糸で引っ張り捕まえるという最も原始的な方法です。結果は惨敗。次に、ネズミ捕り用の粘着シートを使い、シートの上におとりのチョウを置き、食べにきたスズメをくっつけようとワナを仕掛けました。スタッフはかなりの自信があったようですが、捕れたのはおとりに誘われてきたチョウとネズミ。さすがはネズミ捕りです。

結局、毒蝶であるマダラチョウを食べることができず絶食状態になり力尽きたのか、それとも、スズメの身に何か異変が起きたのかはわかりませんが、いつの間にかスズメの姿は見なくなったそうです。真実は、温室の生物だけが知っているのでしょうか。一番の疑問はスズメがどうやって入ったのかです。」

以上、現場より昆虫館大事件の報告を終わります。

(山本)

いんぷおめいしよん

▶1月 冬の虫観察会

「かくれんぼ」が上手な冬の虫たち。

君も「鬼」になって、冬の昆虫を探してみよう!

日時: 1月23日(日) 午前10時30分～午後3時頃

場所: 昆虫館会議室に集合～万葉の森(徒歩約3km)

内容: 冬越ししている昆虫の野外観察

対象: 小学生以上で、家族単位(定員50名)

参加費: 無料(入館料は必要/大人310円・学生210円・小人100円)

申込: 1月12日(水)午前10時より電話受付、先着順

交通: 当日は近鉄大和八木駅より奈良交通バス運行

▶2月 第27回むしむしゼミナール

「化石の不思議」

本物の化石を見ながら生物進化の不思議を感じよう

講師: 奥田忠良氏(地学研究家)

日時: 2月27日(日) 午後1時30分～3時30分頃

会場: 昆虫館 会議室

内容: 大昔のゴキブリや恐竜等の化石を紹介

対象: 小学生以上(定員35名)

持物: 筆記用具 参加費: 無料(入館料は必要)

申込: 2月16日(水)午前10時より電話受付、先着順

▶第10回企画展

「温室のいきものたち(Ⅱ)」

～小さなものから大きなものまで」

期間: 3月22日(水)～5月14日(日)

会場: 橿原市昆虫館 展示温室

▶3月 企画展関連/第27回観察教室

「展示温室裏方体験」

日時: 3月25日(土)と26日(日)の2回実施

各日共、午後1時30分～3時30分頃

場所: 会議室に集合～展示温室・飼育室等で実習

内容: 職員と一緒に、虫の世話等の裏方を体験

対象: 小学校4年生以上(定員は各日10名)

申込: 往復ハガキにて、ご応募下さい。

※くわしくは、昆虫館までおたずね下さいね。

橿原市昆虫館だより GONTA Vol.10 No.1

2000年(平成12年)1月4日発行 (通巻37号)

編集・発行/ 橿原市昆虫館

〒634-0024 奈良県橿原市南山町624番地

Tel. 0744-24-7246 Fax. 0744-24-9128

印刷・製本/ 株式会社 中西文山堂